

書評

古田徹也著

『言葉の魂の哲学』

(講談社選書メチエ、2018年)

三浦 隆宏

著者は今年の春に不惑を迎えた。遠目から見ていやや生き急いでいるのではないかと心配になるほど、ここ数年の活躍は目覚ましい。同世代の若手研究者らが定職を得るのに汲々としているなか、新潟大、専修大を経て、あっという間に母校の東大文学部に呼び戻された。単著書だけでもすでに4冊を数える。まさにアカデミアの出世魚そのものである。

評者はウイトゲンシュタインにしても言語哲学にかんしても専門的な知見をなんら有してはいない。よって、ここは著者の師の一人である熊野純彦氏の言に倣い、「自覚的に「しろうと」⁽¹⁾」の目線で本書を評することにしたい。

本書の主題は、「はじめに」で明瞭に告知されている。表題の「言葉の魂」とは、言葉の「表情」のことであり、それは「言葉の独特の響きや色合い、雰囲気といったもの」(本書3頁)、すなわち、「言葉がある種の多面体としてかたちを成す」(7頁)ということである。フレーゲ以降の現代の言語哲学は、「論理学上の研究を基にしているがゆえに、言葉の響きや色合いといったものを文の非本質的な付加物として扱う傾向が強い」(4頁)。著者は、それに対し、本書の道筋を「言うなれば、現在では忘れられている言語哲学の鉱脈を掘り下げていく作業である」と記したうえで、本書を「ウイトゲンシュタインの哲学の新たな側面に光を当てるもの」、そして「クラウスの言語論を本格的に取り上げ、その中身と意義について明らかにする稀な一冊でもある」と揚言する(6頁)。

なお、本書は全体で三つの章からなるが、第1章と第3章がそれぞれ50～60ページ前後であるのに比して、第2章には90ページ超もの紙数が割かれている。「本書で特に彼〔ウイトゲンシュタイン〕に注目するのは、言葉に霊や魂が宿り、息づき始めると言いたくなる体験——あるいは逆に、言葉が生命を失い、いわば無表情になると言

いたくなる体験——をめぐって、彼が多くの思索を遺しているからである」(70頁、傍点は原文、〔 〕内は引用者)、そう著者は第2章の冒頭で書いているが、これは確かにウイトゲンシュタインの哲学について新書や概説書でいどの知見しか有しない評者にとって、興味深い一文であった。

では、まず各章の内容を簡単に跡づけておこう。

第1章「ヴェールとしての言葉——言語不信の諸相」では、中島敦の小説「文字禍」とホーフマンスタールの作品「チャンドス卿の手紙」を主な題材としながら、「文字が、ゲシュタルト崩壊によって無意味な線の集まりになってしまうこと」(26頁)や「個々の言葉がそれぞれもっていたはずの固有の色合いが曖昧になり、あたかもそれらの輪郭が失われてしまったかのような感覚に襲われる」(46頁)こと、つまりは、言葉の「ゲシュタルト崩壊が全面化していく過程」(47頁)を、ある種の切迫感とともに描き出す。そのうえで、「文字禍」の老博士とチャンドスが陥った苦境の理由を、「ヴェール」あるいは「影」として言葉を捉える見方、すなわち、現実の不完全な代理・媒体としての言語観(61頁)に両者がとらわれている点にもとめ、そこから逆に、「我々の生活の影(あるいは、生活を覆うヴェール)としてではなく、ときにそれ自体が主題化・対象化するような、いわば「生活の一部」として言葉というものを捉え」(66-67頁)るという、本書の核となる観点が打ち出される。本章は、「本書で扱う問題の輪郭を明確にしていく」(5頁)という点で、いわば地ならしの章であると言えるが、漱石の『門』やサルトルの『嘔吐』、さらにはフランシス・ベーコンによる言語不信論やフリッツ・マウトナーの言語論への言及が絶妙な匙加減のものとなされており、非常に読ませる章となっている。

ついで第2章「魂あるものとしての言葉——ウイトゲンシュタインの言語論を中心に」では、この前世紀を代表する哲学者の言語論が検討される。そのさい90ページ超にも及ぶ論述を牽引する着眼点こそが、「ウイトゲンシュタインは二つの相反する主張を行っているように思われる」(81頁)という文言にほかならない。すなわち、「彼は一方では、〈言葉を理解していると言えるため

には、その使い方を知っているだけでは足りない。言葉を体験している——胸の内に感じている——のでなければならない」と主張しているように見え、「しかし、他方では、〈理解している言葉に対して我々は何かを感じ続けているわけではない〉とも主張しているように見える」（同前）というのだ。そして、著者の解釈では、「この矛盾ないしは緊張関係こそが、ワイトゲンシュタインの言語論の勘所をかたちづくっている」のであって、「その内実を明らかにしていくこと」が本章の目的なのである（82頁）。

そのうえで、著者はまず言葉の「理解の二面性」（87頁）に着目することで、「言葉を理解しているということには、当該の言葉を他のどんな言葉に置き換えてもしっかりこないということも含まれる」（91頁）というテーゼを引き出し、ついで「言葉の立体的理解」というあり方（99頁）に目を向け、また有名な「アスペクト盲の思考実験」（102頁）の議論——すなわち、「言葉に魂が存在しないという事態、つまり、違和感や不快感を覚えることなく、ある記号を別の任意の記号に置き換えることができる、という事態を想定する議論」（110頁）——をも辿ることで、「はじめに念頭に浮かんできた言葉から、類似しつつも異なる別の言葉へ連想を広げ、またその言葉からもさらに連想を広げていくという、そうした一連の「実践そのもの」としての「〈じっくりくる言葉を選び取る〉という実践」（119頁、傍点は原文）を、ワイトゲンシュタイン言語論の要諦として導き出す。要するに彼の考えでは、「言葉に魂が宿る」とは、「ある文脈を背景に、あるタイミングで発せられた、あるトーンという言葉が、ある表情や響きをもって我々に立ち現れてくる」ことにほかならず（118頁）、ゆえに「言葉を意味をもった有機的なまとまりとして感じるため」にも、私たちは「その言葉たちが織り込まれた生活のなかに自分自身が深く入り込み、様々な実践や事物に習熟しているのでなければならない」のである（121頁）。そうすると、第1章で見た、老博士やチャンドスが陥ったゲシュタルト崩壊の現象は、「言葉に宿る魂や表情なるものが当の言葉とは独立に常に存在する、という混乱した見方」（130頁）を彼らが採っ

ていたことに、やはりその原因があったということになる。——「言葉を立体的に理解するとき、そこにあるのは緩やかな家族的類似性で結びついた個々の言葉と、それぞれの使われ方への連想だけである。その立体の内部に、言葉とは別の実体が隠れているわけではないのだ」（124頁）。

著者には『ラスト・ライティングス』（講談社、2016年）というワイトゲンシュタイン晩年の遺稿集の訳書もあるが、本章では、それや『心理学の哲学』といった「しろうと」にはあまり馴染みのないテキストを援用することで、たしかに彼の哲学の「新たな側面に光を当てる」ことに成功していると言ってよい。〈魂なき言語〉としての人工言語・エスペラントにかんする記述や日本語における〈魂ある言語〉の探究の一例としての九鬼周造の「いき」という言葉をめぐる挿話など、周到なまでの目配りがなされており、読んでいてまったく飽きることがない。

そして第3章「かたち成すものとしての言葉——カール・クラウスの言語論が示すもの」では、「ヴァルター・ベンヤミン、テオドル・アドルノ、エリアス・カネッティ、ピエール・ブルデュー、ジャック・ブーヴレス」（165頁）といった錚々たる思想家や哲学者らに深い影響を与えた「稀代の諷刺家・論争家クラウス」（164頁）の言語論を辿ることで、「クラウスからワイトゲンシュタインへの思想上の影響関係を推し測る」（167頁）ことが試みられる。まず前半では、クラウスの「最も厳しい攻撃対象のひとつだった」（172頁）言語浄化主義者や言語融合主義者らの問題点を指摘しつつ、前章で輪郭づけておいた「〈言葉の立体的理解〉というものを彼が最重視している点」、および「言葉が多面性をもつものとして立ち上がってくる——奥行きあるものとして把握される——というのが、言葉がかたちを成すという契機の内実」にほかならない点が再確認される（178-179頁）。そして著者は、「クラウスの言語論は、〈個々の言葉のもつ奥行きや多面性に触発され、その言葉のかたちを把握する〉という実践を重視する姿勢によって貫かれている」（179-180頁）と指摘することで、「世紀末ウィーンを席卷した「言語不信」（180頁）の状況下において、「言語

の豊饒な可能性」に対して「厚い信頼」を寄せつけた点にこそ、「クラウスの言語論の最大の特徴」を見て取るのである（同前）。

つづく後半では、「言葉の多義性を把握し、立体的な理解ができるということには、はたしてどのような重要性があるのか」という「前章の後半で積み残していた問い」（200頁）が考察される。クラウスが「個々の言葉の微妙なニュアンスの違いを比較や例示などを通して具体的に浮き彫りにしていく」「言葉の実習（Sprachlehre）」を説いていたとしたうえで（201頁）、彼が「その生涯を通じて批判の矛先を向けた」ものが「当時の新聞ジャーナリズム」、「とりわけ、新聞の紙面に氾濫する紋切り型の常套句ないし決まり文句と、それらによって構築されるステレオタイプな言説」であったと指摘し（203頁）、そして「ウイトゲンシュタインがクラウスから継承し、二人にはっきりと共通しているのは、言語批判^{クリティク}の根本的な重要性に対する認識であり、言うなれば、〈言葉の実習〉への希望である」（226頁）と記したあと、著者は本文をこう締めくくる。——「自分でもよく分かっていない言葉を振り回して、自分や他人を煙に巻いてはならない。出来合いの言葉、中身の無い常套句^{クヴァイフェル}で迷いを手っ取り早くやりすごして、思考を停止してはならない。言葉が生き生きと立ち上がってくるそのときに着目し続けた二人の自然言語の使い手、「世紀末ウィーン」の申し子にして異端児たちが、それぞれの言語批判の活動を通じて絞り出したのは、詰まるところ、そうした単純な倫理である」（228頁）。

以上、書評の一応の作法にのっとり、本書の内容を章ごとに辿ってきたが、各節の最後にその都度「まとめ」と「展望」が記されていることを思えば、その作業は蛇足以外の何物でもない。卓抜した例の使い手であったウイトゲンシュタインの影響からか、著者の繰り出す例も親しみやすいものばかりである（たとえば、ある友人の性格を「やさしい」という言葉で言い当てる場面（112-114頁、124-126頁）や、著者の友人が言ったという「うん、このスープ、全然旨い」（170-171頁）など）。著者はクラウスや「言葉」についての論考を2008年から2012年にかけて発表しつづけており⁽²⁾、

第3章ならびに本書の主題はそれらを下敷きにしたものであろうが、このように一書へとまとめ上げる筆力は相当なものである。本書が、著者が大学三年生のときに受けた佐藤康邦氏の倫理学概論の講義——「形態と倫理」という副題の付いた、「ユニークでスケールの大きな講義」——に対する十八年越しの「長大なレポートでもある」という「あとがき」の一節も胸に響く（244-245頁）。

なお、評者は哲学カフェという哲学対話の活動に長年かかわってきたが（そして今回、本書を評する機会を得たのもそれが要因の一つではないかと推測するのだが）、クラウス＝ウイトゲンシュタインとともに著者が提示する〈言葉の実習〉——「生活の流れのなかで用いられ、生活のかたちを反映している個々の言葉に注意を払い、吟味し、それらを立体的に理解できるよう努めること」（226頁、cf.8頁）——とは、ある意味で哲学カフェの場で人びとが行なおうとしている目標を言語化してくれたものであるようにも思われた。奇しくも評者は2002年に「やさしさ」をテーマにした哲学カフェの進行をしたことがあるけれど、そこで私たちが行なっていたのも、「やさしい」という馴染みの言葉をあらためて立体的に理解するプロセスの一種（113頁）なのであって、「類似した言葉同士の繊細な差異に分け入り、言葉を立体的に理解し、じっくりく言葉を選び取るよう努力するという営み」（202頁）にほかならなかつたのではないか。哲学対話という（とりわけ初等・中等教育の現場にそれを導入しようとする向きには）、「思考や議論の訓練」⁽³⁾として捉えられる傾向が強いが、それとともに（あるいはそれ以前に）、言葉が「じっくりこないとこの感覚に忠実であり続けようとする姿勢」（193頁）を身につけるための訓練の場として捉えてもよいのではないか——、そう思った次第である。

ともあれ、相応の文字数を与えられた書評であるからには絶賛するだけでは評者としてその責めをふさいだことにはならない。「しろうと」ながら、いくつか疑問を呈してみよう。

第一に、本書に女性の言葉がまったく出てこないのはなぜか（182頁の「あれに「お断り」ってお言い！」が唯一の例外だが、この台詞を書いた

のは男性のネストロイである)。ここで、本書を相対化するために高橋源一郎氏の発言を引いておくと、彼はある文化人類学者との対談でこう述べていた。——「ぼくがいいなと思う人や言葉って女性やマイノリティ、弱者、そして、そこから発せられたものが多いんです。男性、マジョリティ、強者の言葉はだいたいつまらない。[中略]エリートの言葉は胸を打たないし、説得力がない。マイノリティの度合いが強いほど言葉に強度がある。典型的なのが、女性でしかもユダヤ人の哲学者だったハンナ・アーレントです。少数派に属する人間には、多数派の人間よりずっと社会の矛盾が見えているからでしょう。」⁽⁴⁾

評者はなにも、ワイトゲンシュタインやクラウス、あるいは著者の言葉が、強者の言葉でつまらなく、胸を打たず、説得力がないと言いたいのではない。ただ、先の引用で典型としてその名が挙げられていたアーレントを勉強しつづけている者として、たしかに彼女は言葉の「ゲシュタルト崩壊」のような生易しいものではない、文字どおり「言葉を失った」⁽⁵⁾ 壮絶な経験をしていたなと思うだけである。「われわれは家を失った。それは、日々の生活のなじみぶかさの喪失を意味する。われわれは職を失った。それは、この世でなにか役に立つという自信の喪失を意味する。われわれは言葉を失った。それは反応の自然さ、意思表示の単純さ、ありのままの感情表現の喪失を意味する」⁽⁶⁾——こう彼女は、いまだ無国籍の状態にあった1943年に書きつけていた。「言語に関する限られた思考の一断面を切り取っているに過ぎない」(8頁)という断りがある以上、世界大戦の期間に多くのユダヤ人らが陥った「失語」とも言える状況は、本書の埒外にあるのは当然だとしても、「二十世紀前半のおよそ五十年間」(同前)を生きた女性であれば、たとえばシモヌ・ヴェイユ(1909～43)がいたりする。視野をさらに前世紀後半にまで延ばせば、『サバルタンは語ることができるか』のガヤトリ・スビヴァクもいる。これら「女性やマイノリティ、弱者」の言葉が宿す「魂」について、著書はどう思うのだろうか。

ほかにもこの国の書き手であれば、石牟礼道子を挙げてもいい。かりに石牟礼の『苦海浄土』の

記述に「魂」——すなわち「言葉の独特の響きや色合い、雰囲気といったもの」——が宿っていると言いうるならば、それはどういうわけなのか。ここで本書に目を戻すと、冒頭から出てくる「いずい」(北海道や東北地方の方言)や第2章で参照される「むつごい」(讃岐地方、香川県でよく使われる方言)、そして第3章で考察される「やばい」が、いずれも単語である点が気になりもする。しかし、言葉に「魂」を宿すのは、たとえば「嫁に来て三年もたたんうちに、こげん奇病になってしもた。残念か。うちはひとりじゃ前も合わせきらん。手も体も、いつもこげんふるいよるでっしょが。自分の頭がいいつげんとに、ひとりであるうとじゃもん。それでじいちゃんが、仕様なかなおなごになったわいちゅうて、着物の前をあわせてくれらす」⁽⁷⁾といった語りによる文章なのではないか。いっぽう、本書が分析している「言葉」とは、総じて「単語」の域にとどまっていやしないか。これが本書に対する第二の疑問である。

「しろくと」目録で本書を通読してきて感じたのは、総じてその記述のなめらかさである。そして、隙がなく巧みに構成されている点だ。当然それは、賞賛の言葉でありつつも、一方では物足りなさの表明でもある。記述がなめらかであるということは、ひっかかりを覚えないということでもあり、巧みに構成されているということは、主題や問いに著者が振り回されていない、ということでもあるからだ。そう易々とは飲み込めない異物感の味わいや書き手の逡巡そして躓きをも読書に求めてしまう、それはもちろん読み手のエゴではあるのだが。

評者でも知っているワイトゲンシュタインの有名な文章に、「——私たちはアイスパーンに入ってしまった。摩擦がないので、ある意味では条件は理想的だが、しかしだからこそ歩くことができない。私たちは歩きたい。そのためには摩擦が必要だ。ざらざらした地面に戻ろう！」⁽⁸⁾という一節があるが、それを引き合いに出すならば、本書はツルツルして歩くことがままならない「アイスパーン」ではないにせよ、しっかりと舗装された遊歩道のような趣を有していると言えないか。2013年に「行為の哲学入門」という副題をもつ

単著（新曜社）を公表以来、本書、そして『論理哲学論考』の解説書（角川選書、2019年）、『運』の倫理学史（ちくま新書、2019年）とまさに精力的に自身の有する多彩な哲学的知見を著者は世に問うてきた。いずれも版を重ね、よく読まれている。著者の手にかかれば、いずれの哲学的主題も読者は「摩擦」を感じずにスイスイと読み進めることができるのだ。

ただ、不惑を過ぎた著者がこれから歩む長い途は、「ざらざらした地面」であるべきなのではないか。ウィトゲンシュタインがまさにそうであったように。

註

- (1) 熊野純彦『レヴィナス 移ろいゆくものへの視線』岩波現代文庫、2017年、320頁。
- (2) 古田徹也「カール・クラウスにおける〈言葉の形態〉と倫理」、『倫理学紀要』第15譚、東京大学大学院人文社会系研究科倫理学研究室、2008年、62-82頁、同「言葉を選び取るとはどのようなことか——20世紀前半ウィーンの思考圏から」、『平成17～19年度 科学研究費補助金・基盤研究(B)〈倫理学の文化形態論的研究〉研究成果報告書』、2008年、229-254頁、同「言語の共同性と個別性の間——「言葉の表情」という観点から」、『理想』685号、理想社、2010年、73-84頁、同「言葉の溶流に抗して——カール・クラウスの言語論」、『思想』第1058号、岩波書店、2012年、262-279頁。
- (3) 鷺田清一監修 高橋綾・本間直樹著『こどものてつがく ケアと幸せのための対話』大阪大学出版会、2018年、viii頁。前後を補って引用し直すと、ここで著者らは、「こどもとの哲学対話は、成績向上のためでも、思考や議論の訓練でもなく、こどものケアと幸福のための活動であるべきだ」と説いている。
- (4) 高橋源一郎+辻信一『「雑」の思想 世界の複雑さを愛するために』大月書店、2018年、38頁。
- (5) ハンナ・アーレント「われら難民」齋藤純一訳、『アイヒマン論争 ユダヤ論集2』みすず書房、2013年、37頁。
- (6) 同前。
- (7) 石牟礼道子『新装版 苦海浄土 わが水俣病』講談社文庫、2004年、150頁。近年では、現象学者の村上靖彦氏が看護師らの語りの記述・分析に取り組んでいるのはよく知られているよう。
- (8) ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン『哲学探究』丘沢静也訳、岩波書店、2013年、90頁。傍点は原文。